

下畑享良 神経症候学 *note*

〈興味を持った「脳神経内科」論文〉のエッセンス

下畑享良【著】

評者

杉田 陽一郎

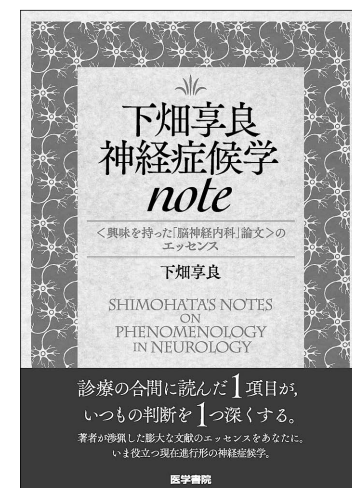
東京ベイ・浦安市川医療センター神経内科部長

近年、画像検査や遺伝子検査をはじめとした検査技術の進歩は著しい。その一方で、ベッドサイドでの病歴聴取や神経診察が時にないがしろにされてしまう状況をしばしば目にする。しかし、検査主体の診療では、自己抗体の偽陽性や画像の無症候性病変に翻弄されてしまう危険性がある。神経診療の中核は“病歴”と“神経診察”であることはいかなる時代になっても変わらないだろう。その中でも神経症候は、丁寧な観察と深い洞察に基づいた臨床医の「知の結晶」である。本書は、こうした神経症候の歴史的背景、病態生理、そして臨床的な意義を、下畑享良先生が長年にわたり培われた膨大な見識を基に余すところなく伝えてくれる書籍である。

神経症候学というと古典的と思われるかもしれないが、決してそうではない。例えば本書で紹介されている、マスク装着により下方の視覚情報が制限され、深部感覚失調による歩行障害が悪化する“face mask sign”は、2020年に報告された神経所見である。このように、神経症候は決して過去の遺物ではなく、日々の臨床における観察に基づき、新しい気づきが生まれ続けている分野であることも改めて学ぶことができる。

本書で網羅されている多彩な症候のうち、観察眼の重要性を再認識させられた魅力的な所見をいくつか紹介したい。まず“water immersion wrinkling test”は、長時間指を水に付けて指の皮膚がふやけるかどうかを診ることで、small fiber neuropathyによる自律神経障害を調べる神経所見として紹介されている。Small fiber neuropathyはどうしても除外診断の要素が大きく、陽性所見に乏しい印象が個人的にあったが、こうした所見は簡便かつ病態生理に根差しており非常に興味深く、明日からすぐに確認してみたいと思っている。また、半側空間無視の患者が両足を頻回に交差させる現象をとらえた“crossed leg sign”も印象深い。こうした所見は、常日頃からベッドサイドで患者を詳細に観察していないと決して気付けないものである。そして、こうした気付きは、日常臨床に新たな彩りを与え、ベッドサイド診療のモチベーションと向学心を掻き立ててくれる。

内容が素晴らしいことはもちろんのこと、本書は各神経症候が見開き2ページにまとめられており、視覚的なイラストも豊富であるため、とても読みやすい。多忙な診療の合間にぱっとページを開き、いつでもエッセンスを学習で



きるように配慮されている。神経症候学は「格式高く、とっつきづらい」イメージがあるかもしれないが、そうした抵抗感を少しでも軽減し分かりやすく伝える工夫が随所に凝らされている。このような洗練された内容と構成は、博覧強記でありながら、学会やブログなどで常日頃から私たちに clinical pearl をわかりやすく教えてくださる下畑先生でしかなしえない^{わざ}業と感じる。

改めて本書は、若手脳神経内科医にはもちろんのこと、神経症候学を学びなおしたい専門医、さらには総合診療、プライマリケア、救急、研修医など、神経症候を学びたい全ての医師にとって、日々の学習と臨床の振り返りに極めて有用な唯一無二の書籍である。

最後に、今回このような素晴らしいご著書の書評を執筆する機会を頂戴したことは、私にとって望外の光栄である。

A5・352頁

2026年4月

定価：7,700円

(本体7,000円+税10%)

[ISBN978-4-260-06546-7]

医学書院刊